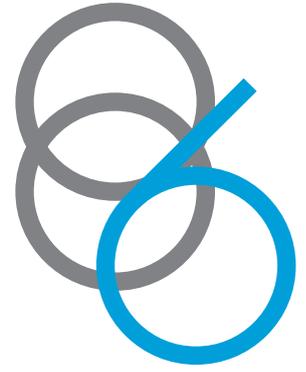


# 平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター

題字 松井一實 会長

## 核兵器禁止条約50か国批准に寄せて

### 平和首長会議が公開書簡を发出

10月24日に核兵器禁止条約の批准国が50か国に達し、同条約が来年1月22日に発効することが確定しました。

このことを受けて、平和首長会議（会長 まついかずみ 松井一實 広島市長）では、国連関係者や全ての国連加盟国に対して公開書簡を发出しました。この書簡では、核兵器禁止条約の発効確定という歴史的な出来事を歓迎する一方で、今後、同条約を包括的で実効性の高いものとし、核兵器廃絶への推進力としていかなければならないと訴えています。

また、平和首長会議の全加盟都市に対し、様々なツールを活用してこの公開書簡を各国政府や市民に広く伝えるよう依頼しました。

### 市民との協働イベントの開催

核兵器禁止条約の発効が確定したことを受けて、10月25日（日）に平和首長会議と市民との協働イベントが開催されました。

原爆ドーム前に被爆者や市民約200人が集い、同条約の発効確定を共に祝うとともに、今後日本を含め、批准国を広げていくために頑張っていくことを誓い合いました。

松井会長はこのイベントに出席し、「『こんな思いを他の誰にもさせてはならない』という被爆者の方々の強い思いと、核兵器は『絶対悪』であるとの市民社会



市民との協働イベントの参加者

の受け止めが国際社会を動かし、条約の発効として結実したということ、歴史的事実として忘れてはならない。」というメッセージを発信しました。

### 青少年ピースキャンドルの集いを実施

同日の夕方には、平和首長会議が原爆死没者慰霊碑前で青少年ピースキャンドルの集いを開催しました。このイベントには、松井会長と小泉 こいずみたくし 崇事務総長（平和文化センター理事長）のほか、核兵器廃絶を訴える署名活動「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」の参加高校生や、平和記念公園で外国人観光客に向けてガイド活動を行っているユースピースボランティア約30人が参加しました。

## 目次

核兵器禁止条約50か国批准に寄せて	①
被爆75年 平和記念式典	②
長崎原爆犠牲者慰霊の会	③
被爆体験記「原爆の熱線に焼かれて」(瀧口秀隆)	④
国際平和シンポジウム2020	⑤
子どもたちの平和のメッセージ展/ピースライター2020/ ピースマッチ・ピースアクティビティ開催支援	⑥
国際平和デー/被爆75年の取組「No more Hiroshima! No more Nagasaki!」/ 小泉事務総長がアルゼンチン、ノルウェー大使館を訪問	⑦
被爆75年企画展「礎を築く一初代館長 長岡省吾の足跡」/ 収蔵資料の紹介「23歳 姉の死」	⑧

資料館本館「市民が描いた原爆の絵」展示入替/ 資料調査研究会研究報告第16号発行/ 海外からの来訪者が発信するメッセージ	⑨
高校生が描く「原爆の絵」が完成	⑩
ウェブ会議システムによる海外への被爆体験証言	⑪
米国・ハワイで初のヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展/ 被爆体験伝承者から(熊谷操、小林悟、高岡昌裕)	⑫
追悼平和祈念館ホームページをリニューアル/ 追悼平和祈念館企画展「時を超えた兄弟の対話」を来年2月28日まで延長して開催/ 被爆体験記の執筆をお手伝いします	⑬
「やさしい日本語」講座/外国人のための安全教室	⑭





青少年ピースキャンドルの集いの参加者

始めに松井会長が挨拶の中で、「今後の活動に向けた決意を述べる署名キャンペーン参加高校生やユースピースボランティアの行動によって、核兵器のない

世界こそがあるべき姿であるということ、世界の人々の共通認識となり、日常生活の中で平和を追求する行動に繋がることを願っている」と述べました。



原爆死没者慰霊碑前で挨拶する松井会長

青少年らは、キャンドルの火を灯しながら慰霊碑を参拝し、原爆死没者に長年待ち望んできた核兵器禁止条約の発効が確定したことを報告しました。報告の中で彼らは、「被爆者の『こんな思いを他の誰にもさせてはならない』という強い思いを広めるために世界中の市民が行ってきた活動が実を結び、核兵器禁止条約の発効が現実となったことは大変嬉しいことです、一方で、これから核保有国を含め国際社会が着実に核兵器廃絶へと



青少年による報告

前進していくために、私たち若い世代が何をすべきかという大きな課題を突きつけられたと考えています」と述べ、今後

も核兵器のない平和な世界を目指して、ヒロシマの心に共感する人の輪を広げていくために、仲間と共に精一杯活動していくことを誓いました。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

## 被爆75年 平和記念式典

—原子爆弾投下によって「75年間は草木も生えぬ」と言われた広島は今、復興を遂げて、世界中から多くの人々が訪れる平和を象徴する都市になっています—

被爆から75年目の8月6日（木）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、被爆者や遺族、来賓など約800人が犠牲者の冥福と世界恒久平和を祈りました。

今年の式典は、新型コロナウイルス感染防止のため、参列者の席は2mの間隔を空けて配置され、一般参列席は設けず、さらに、密集を防ぐため式典の前後を含めて一定時間公園内への入場規制を行うエリアを拡大して開催されました。

式典は午前8時に始まり、最初に松井一實<sup>まついかずみ</sup>広島市長と遺族代表2人が、この1年間に亡くなられたことが確認された4,943人の氏名が記帳された2冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は324,129人、名簿総数は119冊となりました。

続いて山田春男<sup>やまだはるお</sup>広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された8時15分に、遺族代表の松木俊伸<sup>まつきとしのぶ</sup>さんと、こども代表の竹宮未菜海<sup>たけみやみなみ</sup>さんが平和の鐘をつき、参列者全員が1分間の黙とう<sup>もくとう</sup>を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。市長は、今、人類が立ち向かっている新型コロナウイルスという新たな脅威は、悲惨な過去の経験を反面教師にすることで乗り越えられるのではないかと述べ、100年前のスペイン風邪の流行や、第一次、二次の世界大戦を例に挙げて、市民社会は、自国第一主義に拠ることなく、「連帯」して脅威に立ち向かわなければならないと訴えました。そして、当時13歳だった被爆者の男性の「自分のこと、あるいは自国のことばかり考えるから争いになるのです。」という訴えや、昨年11月に被爆地を訪れ、「思い出し、ともに歩み、守る。この三つは倫理的命令です。」と発信されたローマ教皇の力強いメッセージ、国連難民高等弁務官として難民対策に情熱を注がれた緒方貞子<sup>おがたさだこ</sup>氏の「大切なのは苦しむ人々の命を救うこと。自分の国だけの平和はありえない。世界はつながっているのだから。」という実体験からの言葉を紹介し、これらの言葉は、人類の脅威に対しては、悲惨な過去を繰り返さないように「連帯」して立ち向かうべきであることを示唆していると述べました。

また、NPT（核兵器不拡散条約）と核兵器禁止条約は、ともに核兵器廃絶に不可欠な条約であり、次世代に確実に「継続」すべき枠組みであるにもかかわらず、その動向が不透明となっているとし、世界の指導者に、広島を訪れ、被爆の実相を深く理解し、来年開催されるNPT再検討会議において、核軍縮を誠実に交渉する義務を踏まえつつ、建設的対話を「継続」し、核兵器に頼らない安全保障体制の構築に向け、全力を尽くすよう求めました。



平和宣言を行う松井市長

さらに、日本政府には、核兵器禁止条約への署名・批准を求める被爆者の思いを誠実に受け止めて同条約の締約国になり、唯一の戦争被爆国として、世界中の人々が被爆地ヒロシマの心に共感し「連帯」するよう訴えていくことや、平均年齢が83歳を超えた被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により生活面でも様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、その支援策を充実するとともに、「黒い雨降雨地域」の拡大に向けた政治判断を、改めて強く求めました。

平和宣言の後、こども代表のおおもりしゅんすけ君とながくらな摘さんが、当たり前だと思っていた日常が新型コロナウイルスの脅威によって奪われ、決して当たり前ではないことに気付かされた経験から、昭和20年（1945年）8月6日、一発の原子爆弾により奪われた当時の市民の日常に思いをはせ、「私たちは、互いに認め合う優しい心もち続けます。私たちは、相手の思いに寄り添い、笑顔で暮らせる平和な未来を築きます。被爆地広島で育つ私たちは、当時の人々があきらめずつないでくださった希望を未来へとつないでいきます。」と「平和への誓い」を読み上げました。

続く「あいさつ」の中で、安倍晋三内閣総理大臣は、現在のように、厳しい安全保障環境や、核軍縮をめぐる国家間の立場の隔りがある中では、各国が相互の関与や対話を通じて不信感を取り除き、共通の基盤の形成に向けた努力を重ねることが必要だと述べ、また、今年発効50周年を迎えたNPTが国際的な核軍縮・

不拡散体制を支える役割を果たし続けるためには、来るべきNPT運用検討会議を有意義な成果を収めるものとするのが重要だと述べました。そして、日本政府としては、結束した取組の継続を各国に働きかけ、核軍縮に関する「賢人会議」の議論の成果を活用しながら、引き続き、積極的に貢献していく考えを示しました。

今年、式典会場では、各国の首脳や代表、自治体首長、また国際機関の事務局長など17人から寄せられたビデオメッセージが、大型スクリーンで放映されました。

このメッセージの中で、アントニオ・グテーレス国連事務総長は、現在、核兵器廃絶を取り巻く国際情勢が厳しい状況にあるとの認識を示し、完全な核兵器廃絶につながる共通のビジョンと道程に戻るよう国連加盟国に繰り返し呼びかけるとしたうえで、核保有国については、今こそ対話と信頼醸成、核兵力の削減、最大限の自己抑制が必要な時だと訴えました。そして、来年のNPT運用検討会議において、締約国はこの共通のビジョンに立ち返る機会があると述べるとともに、軍縮体制の更なる柱である核兵器禁止条約の発効への期待を表明しました。また、若者たちは、市民社会と一丸となって、軍縮という理念のために自分たちの力を発揮できることを幾度も証明してきたと述べ、彼らの考えに耳を傾け、彼らの声が聞かれる場を作るべきだとの考えを示しました。

式典には26都道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む83か国と欧州連合（EU）の大使や代表が参列しました。

式典の様子はインターネットでライブ中継されました。式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページ（<https://www.city.hiroshima.lg.jp>）の「原爆・平和」→「平和記念式典・平和宣言等」→「平和宣言」から閲覧できます。「平和宣言」は9言語（アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、ハンガール語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語）の外国語版も閲覧できます。

（総務課）

## 「長崎原爆犠牲者慰霊の会」の開催

本財団では、平成15年（2003年）から毎年、長崎に原爆が投下された8月9日に、広島から長崎の原爆犠牲者に哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにするため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

広島平和記念資料館東館で開催した今年の慰霊の会には被爆者や来館者など約50人が参加しました。本財団の小泉崇理事長の挨拶に続き、長崎原爆犠牲者

慰霊平和祈念式典のテレビ中継を視聴し、原爆<sup>さくれつ</sup>炸裂時刻の午前11時2分には、全員で黙とう<sup>もくとう</sup>を捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会<sup>さくまくくにひこ</sup>の佐久間邦彦<sup>さくまくくにひこ</sup>理事長が挨拶され、最後に、長崎の被爆者<sup>たにぐちすみてる</sup>、谷口稔<sup>たにぐちすみてる</sup>さんの体験を伝える紙芝居<sup>かしばし</sup>の上演を行い閉会しました。



谷口稔さんの体験を伝える紙芝居の上演

(平和連帯推進課)

## 被爆体験記

### 原爆の熱線に焼かれて

本財団被爆体験証言者  
瀧口 秀隆



## 原爆投下の前後

昭和20年(1945年)8月6日、白島<sup>はくしま</sup>の家では母33歳、8日で5歳になる私、生後10ヶ月の妹、従兄のお嫁さんになる人、この四人で生活をしていました。父は戦地<sup>せんち</sup>にいて留守でした。

午前8時頃、部屋を掃除するので「ちょっとの間、外に出てちょうだい」と従兄のお嫁さんが言ったので、僕は下駄<sup>げた</sup>を履き、母も妹を抱いて外に出ました。

8時頃の空は雲がほとんどなく、真夏の直射日光が容赦なく照りつけていました。僕は日陰を見つけて遊んでいました。しばらくするとB29爆撃機<sup>ばくげきき</sup>の重たいプロペラの音が聞こえてきたので「お母ちゃん、飛行機が来よるけえ、家に帰るよ」と声をかけ、走って家に行き、玄関の引き戸に手をかけ閉めようとしたその時、ピカッと光り、左腕に強い痛みと左ほほと踵<sup>かかと</sup>に軽い痛みを感じました。すぐに強烈な爆風が吹き、5歳前の小さな身体は吹き飛ばされて、台所にあった井戸の縁に頭をぶつけて気を失ってしまいました。

妹を抱いていた母は、ピカッと光った瞬間、背中に強烈な痛みを感じ、気がつくブラウスが燃えていたので慌てて脱いだが、ふくらはぎと踵にも火傷をしました。そんなひどい状態でありながら、息子がいないことに気がつき、倒れた家の柱などを片付けながら探して、気を失っていた僕を助けてくれました。

## 中之島に避難する

僕の左腕は皮膚が剥けて垂れ下がった状態で、母の背中<sup>せなか</sup>は火傷でズルズルになっていました。

とにかく避難しようと、家の中にいて無傷だった従兄のお嫁さんと一緒に土手を登り、長寿園<sup>ちようじゆえん</sup>(昭和20年代前半までは桜の名所として賑わった公園)を抜け、太田川<sup>おおたがわ</sup>の川岸に出ました。川の中ほどには中之島<sup>なかのしま</sup>と呼ばれる島があって、当時水深が浅かったので歩いて渡りました。川の中に足を入れると、飛び上がるほど踵の火傷が痛かった。母はもっと火傷がひどかったので、強烈な痛みがあったのではないかと思います。中之島には大勢の避難者が上がってきて足の踏み場もないような状態になりました。夕方になり、また川を渡って家に帰りましたが、傾いて中に入ることができないので防空壕<sup>ぼうくうこう</sup>で一夜を過ごしました。



## 母の実家で療養をする

被爆後三日目に母の兄と父の姉の夫が来てくれて、家の中を片付け、鍋釜などと一緒に母と僕、妹をリヤカーに乗せて、白島から広島駅を目指して行きました。途中、街並みが焼け野原となり遠くまで見渡せて、火事後の独特の匂いが漂って気持ち悪く、思い出してもぞっとする光景でした。広島駅に着き、大勢の避難者でごった返す中、やっとの思いで列車に乗り込み、母の実家がある福山市の松永駅<sup>まつなが</sup>に着きました。実家は農家で少し高台にあって、屋敷は大きく、私たちは風通しの良い広い座敷で療養を始めました。

母の背中<sup>せなか</sup>の火傷の匂いがひどく、世話をしてくれる祖父母や伯父は臭い臭いと言っていました。ハエが母の背中に卵を産み付けたのか、成長してうじ虫になり背中を這い回るので、ムズムズと痒くなり、自分では取れないので割り箸でつまんで処理してもらっていました。母は41度の高熱が続き、ある日、深い深い井戸の底に落ちるような感覚で意識を失ったそうです。この時はまだ三途の川を渡るの早いということ<sup>さんず</sup>で追い返されたのか、意識が戻りました。その時、これが「死ぬという事か」と思ったそうです。

## 僕の左腕の火傷

左腕の皮膚は熱線で焼けただけ、指先まで火傷して指も曲げられない状態でした。自由に動かせるようにするため、食用油を染み込ませた布を指と指の間にはさみ治療をしてくれましたが、布を剥がす時には強烈な痛みがあって、いつも治療の時には泣いていました。その甲斐があり今は自由に動かせます。このように治療をしてくれたことに感謝をしています。しかし左腕の手の火傷部分がケロイドになり、特に手の甲の肉が盛り上がって手首を動かすことが困難になりました。特に冬の寒い時期はひび割れが出来、動かすと激痛が走るので辛く、ひび割れに膿が出来て袖口がいつも汚れていました。手首が満足に動かさないことを心配してくれた母が、平成6年(1994年)に被爆者援護法が制定されたのを知り、病院に話をしてくれて皮膚移植をしました。その結果、現在では痛みを感じることもなく自由に動かせることに喜びを感じています。

## 妹弘子の死亡

母に抱かれていた妹は頭の一部に熱線を浴びました。被爆二日目に医師の回診があり、その時は「この位の火傷でよかったね」と言ってくれたそうです。確かにその時は元気そうに見えましたが、母は母乳が出ず、粉ミルクもなく、重湯も満足にない、ないないづくしの状態で広島から松永までの長旅もあり、衰弱が激しく、8月22日に母の姉の腕の中で息を引き取ったそうです。療養中の母が娘の死を聞いた時には、火傷で娘の面倒を見てやれなかったこともあり、大声で泣き、涙が止まらなかったそうです。

## 平和を願う

明治維新(1868年)から1945年8月に原爆が投下されるまでの77年間、日本は諸外国との戦争に明け暮れました。太平洋戦争では軍人軍属・民間人等を含めて310万人が亡くなっています。しかし1945年8月から2020年10月までの75年間、戦争をしていません。これからも未来永劫戦争をしない国であって欲しいと心から願っています。

原水爆・核兵器は一瞬にして広大な面積を熱線と爆風で焼き尽くし、破壊し尽くし、更に放射能という目に見えないもので何十年もの間、身体を侵し続ける恐ろしい兵器です。多くの人は原水爆・核兵器がどんなに恐ろしいものかを知らないと思います。世界中の多くの人たちに危険性を認識してもらう為に、これからもヒロシマから訴え続けていき、核兵器を世界中から無くし、戦争のない平和な世界になることを切望します。一滴の水は小さくても、たくさん集まれば大河となり、大きな力と流れを生み出します。この運動を大

きく大きくすることが大切です。私たち被爆者が受けた街の破壊と心身の傷、悲惨な犠牲は広島、長崎で終わりにしたいのです。

## プロフィール

### 【たきぐち ひでたか】

1940年、広島市宇品町で誕生。その後白島町へ移転し、ここで被爆した。

戦後の復興が進むにつれ、被爆建造物などが街並み整備のために無くなっていく様子を報道で知り、1982年頃より会社の休日を使って被爆樹木や被爆建造物など撮影を始めた。被爆後75年間は草木も生えないと言われた中で、いち早く芽生えた樹木に広島の人々は勇気と元気をもらった。

## 「国際平和シンポジウム2020」の開催

8月1日(土)、長崎市と公益財団法人長崎平和推進協会、朝日新聞社の主催、広島市と本財団等の後援により、「国際平和シンポジウム2020」が長崎市の長崎原爆資料館ホールで開催されました。今回のテーマは「核兵器廃絶への道～世界の危機に、歩みをとめない～」で、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため一般傍聴者は募らず、海外の登壇者とはオンラインでつなぎ、その模様はライブ配信されました。

シンポジウムでは冒頭に、ミハイル・ゴルバチョフ元ソ連大統領から「信頼できる国際安全保障づくりのために、国際協力を新たなレベルに引き上げる必要があり、核兵器の問題はその中心でなければならない」とのビデオメッセージが放映されました。

基調講演では、元米国防長官のウィリアム・ペリー氏が「世界の終りまで、あと100秒」をテーマに「核戦争がおきれば、世界規模の環境破壊と文明の終りにつながる。解決には核兵器廃絶しかない」と訴えられました。

続くパネルディスカッションでは、ペリー氏のほか、元外務次官の藪中三十二氏、原子力科学者会報最高経営責任者レイチェル・ブロンソン氏、亜細亜大学国際関係学部講師の向和歌奈氏が、終末時計が残り100秒になっている現状から核戦争のリスクを避けるために必要なことや、日本の役割などについて語り合いました。

最後に特別企画として、ヒバクシャ国際署名事務局キャンペーンリーダーの林田光弘氏、ウェブメディア「70seeds」編集長の岡山史興氏、「核政策を知りたい広島若者有権者の会(カクワカ広島)」共同代表の田中美穂氏、学生団体「ピース・キャラバン隊」前代表の光岡華子氏の4人の若者が「戦後100年まで続く平和運動をつくる」をテーマに、自分たちのこれまでの

活動を通して感じたことや活動を続けていくためのあり方などについて意見を交わしました。

(平和連帯推進課)

## 「子どもたちの平和のメッセージ展」の開催

広島市内のほか全国の60団体の子どもたちから平和への思いを込めたメッセージを集め、8月6日(木)に平和記念公園内に展示しました。

この展示は、例年「ひろしま子ども平和の集い」として平和記念式典に参列する他都市の子どもたちと広島の子どもたちが一堂に会して平和のメッセージを発信する事業がコロナ禍で中止となったことに伴う代替事業として行ったものです。

寄せられたメッセージには「平和な未来をつくるのは私達」「75年間守られてきた平和を今度は私達が守っていき

ます」など平和な未来へ向けた思いが綴られ、来場者からは「子ども達の平和への思いが伝わり、温かい気持ちに

なれた」「子ども達の力強いメッセージに、大人も頑張らなければと思いを新たにできた」などの感想がありました。

コロナ禍の今年、子どもたちが一堂に会することはできませんでしたが、心をついに広島の地から平和のメッセージを発信することができました。

(平和連帯推進課)

## 「ピースナイター2020」の開催

8月7日(金)、本財団と生協ひろしま等との共催により、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを広島東洋カープ応援の場を活用して発信する「ピースナイター2020」をマツダスタジアムで開催しました。

13回目を迎えた今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため入場者数が制限される中、昨年度に続いて「継承」をテーマとして開催しました。

まつい松井市長やゆざき湯崎県知事による平和を願うメッセージを放映し、広島東洋カープの監督・選手はユニフォームにピースワッペンを装着しました。

約5千人の観客と選手が一体となり、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向け平和のメッセージを発信しました。

ピースワッペン

(平和連帯推進課)



## ピースマッチ・ピースアクティビティの開催支援

8月9日(土)、サッカーJ1の「ピースマッチ」として、平和首長会議及び本財団の後援のもと、サンフレッチェ広島対湘南ベルマーレの試合が、エディオンスタジアム広島で開催されました。当日は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため入場者が制限される中、約2千9百人の観客が来場しました。

会場内外では「One Ball. One World. スポーツができる平和に感謝」というキャッチコピーの下、ピースアクティビティとして、

- ① 試合開始前に、来場者全員による黙とう、まつい松井市長と被爆者による平和のメッセージ放映とキックインセレモニー
- ② 広島のサッカーの歴史パネルの展示
- ③ 被爆の実相と現在の核兵器の状況、そして平和の大切さを、未来を担う子どもたちに伝える「ヒロシマを知ろう!! 8月6日、きのご雲の下で」のポスター展示

など、様々な取組が行われました。

サンフレッチェ広島、サポーター、協力団体等の皆様と連携し、多くの方にスポーツを通じ核兵器廃絶に向けた平和への思いを届けることができました。

(平和連帯推進課)



展示したメッセージ



「ヒロシマを知ろう!! 8月6日、きのご雲の下」のポスターの展示を見る人たち

## 「国際平和デー」の開催

国連は、毎年9月21日を「国際平和デー」と定め、世界の停戦と非暴力の日として、この日1日、敵対行為をやめるよう呼び掛けています。

本財団では、この趣旨に賛同し、毎年、記念行事を開催しており、今年は市民約50人が参加して原爆死没者慰霊碑に献花を行い、一分間の黙とうを捧げた後、「2020年までの核兵器廃絶を！」という平和首長会議の横断幕を慰霊碑前に掲げ、核兵器の廃絶を訴えました。また、同時刻に平和の鐘を鳴らし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を祈念しました。

国内外の平和首長会議加盟都市においてもホームページやフェイスブックを通じた100日前メッセージの発出やメールマガジンによる呼び掛けにより、様々な記念行事が開催されました。

(平和連帯推進課)

## 被爆75年の取組 “No more Hiroshima! No more Nagasaki!”

### メッセージビデオを配信

被爆75年の今年、平和首長会議では、世界中の人々に核兵器廃絶への思いを共有してもらうため、広島・長崎市の被爆者や市長、国連、各国政府、NGO、平和首長会議役員都市の代表23人の方々にご協力いただき、メッセージビデオ “No more Hiroshima! No more Nagasaki!” を作成し、7月20日にインターネット上に公開しました。

平和首長会議の加盟都市や関係団体のネットワークを活用し、このメッセージビデオを幅広く拡散することで、核兵器廃絶に向けた国際世論の拡大を目指しています。

現在までに、8月6日の平和記念式典に参列するために広島市を訪れた各国大使等に視聴していただいたほか、平和首長会議の専門委員により、米国で8月6日及び9日に開催された核兵器廃絶に向けたオンラインイベント “#Stillhere: 75 Years of Shared Nuclear Legacy” でも放映されました。

メッセージビデオは下記 URL からご覧いただけます。

【URL】 <https://youtu.be/DOO4IIrZ7Ow>

### 平和教育ウェビナーを開催

平和首長会議の加盟都市において、次代を担う青少年が平和への思いを受け継ぎ、主体的に活動していくよう促すため、8月4日に平和教育ウェビナー（オン

ラインでのセミナー） “No more Hiroshima! No more Nagasaki!” 一次代の平和活動を担う若者たち一を開催しました。

ウェビナーでは、まず専門家による「現下の核兵器を巡る国際情勢」についての講義を聴講し、続いて広島・長崎で活動する青少年と、過去に平和首長会議の「青少年『平和と交流』支援事業」に参加した5都市の青少年たちが、それぞれの都市で行っている平和活動や平和への思いについて発表しました。各発表後には、10か国17都市から参加した聴講者たちが質疑応答を通じて発表者と意見交換を行いました。



平和教育ウェビナーの様子

当ウェビナーの様子はインターネットで同時配信され、多くの方々に視聴していただきました。同時配信を録画した動画は、青少年の平和活動への主体的な参画を促すために、平和首長会議のウェブサイトで公開しています。

【URL】 [http://www.mayorsforpeace.org/jp/whatsnew/news/200701\\_news.html](http://www.mayorsforpeace.org/jp/whatsnew/news/200701_news.html)

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

## 平和首長会議加盟10,000都市を目指して、未加盟都市への呼び掛けを強化 小泉事務総長がアルゼンチン及びノルウェー大使館を訪問しました

平和首長会議の小泉<sup>こいずみ</sup> 崇 事務総長（本財団理事長）は、10月15日（木）、加盟都市の拡大により核兵器廃絶に向けた国際世論の醸成を図るため、アルゼンチン共和国大使館及びノルウェー王国大使館を訪問しました。面会に際し小泉事務総長は、長年に渡る平和首長会議の活動に対する協力への謝意を伝え、10,000都市を目指し加盟拡大を推進している旨を説明し、両国内の未加盟都市に対する呼び掛けを要請しました。

アラン・クラウディオ・ペロー駐日アルゼンチン特命全権大使は、「約100都市あるアルゼンチンの加盟都市数を200都市に拡大したい。」と述べられました。

また、インガ・M・W・ニーハマル駐日ノルウェー特命全権大使は、ノルウェーで既に100都市以上が加盟していることに驚き、「政府として自治体の活動に直接介入はできないが、加盟都市が増えるよう自治体に働き掛けていきたい。」と発言されました。この他にも両大使からは、今後とも平和首長会議の取組に協力していくとの



駐日ノルウェー特命全権大使と

力強い言葉を頂きました。

平和首長会議では、今後も加盟拡大を促進するため、各国大使への協力要請等様々な働き掛けを実施していきます。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

## 被爆75年企画展 広島平和記念資料館のあゆみ 第一部 礎を築く 一初代館長 長岡省吾の足跡

展示場所 広島平和記念資料館東館1階  
企画展示室  
展示期間 令和2年7月22日(水)  
～令和3年2月23日(火・祝)  
\*12月30日、31日は休館日です。

広島平和記念資料館は今年8月、開館65年を迎えました。開館以来、被爆の痕跡が残る資料を展示し、原爆被害の実相を伝えてきました。その展示の基になったのは、一人の人物が被爆直後から広島市内に入り、焼け跡から収集した資料です。その人物の名は長岡省吾。資料館の初代館長です。長岡氏は資料を収集するだけでなく、原爆に関する調査・研究を行い、生涯をかけて被害の実態を明らかにしようとしました。

この企画展では、近年長岡氏の遺族から資料館へ寄



広島護国神社の玉砂利を見つめる長岡氏(長岡省吾収集)

贈された資料を基に、同氏の足跡をたどりながら、資料館が開館するまでの歩みと開館初期の状況について紹介しています。

「もう二度と原爆の惨禍を繰り返してはならない」という強い思いで資料館の礎を築いた長岡氏。この企画展を通してその情熱と努力に向き合い、被爆の実相を伝え続ける大切さを実感していただければと思います。

### 【展示構成】

- 焦土を歩いて
- 収集した資料の公開
- 広島平和記念資料館の開館
- 衰えぬ情熱

### 【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

TEL (082) 241 - 4004

### 「収蔵資料の紹介」コーナー

## 「23歳 姉の死」

展示場所 広島平和記念資料館東館1階 企画展示室  
展示期間 令和2年7月～令和3年2月(予定)  
展示資料 実物資料8点(塚本静江さん:上着とスボン、防空頭巾、記章・名札/下久保喜久代さん:ブラウス/田川アサヨさん:ブラウス、下着、モンペ)

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館で収蔵している約二万点の資料の中から、テーマに沿って数点ずつを展示しています。

昭和20年(1945年)8月6日、一発の原子爆弾により、広島のみならず、一瞬にして廃虚と化しました。大量の放射線を浴び、体を焼かれ、多くの人々が苦しみながら亡くなりました。

今回は、23歳で亡くなった3人の女性の遺品を紹介しています。



喜久代さんが当日着ていたブラウス  
このブラウスは、洋裁が得意だった妹のトミ子さんが仕立て、喜久代さんの結婚のお祝いに贈ったものです。真っ白な絹は血で染まり、何度洗ってもその色が落ちることはありませんでした。

### 【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課

TEL (082) 241 - 4004

## 資料館本館「市民が描いた原爆の絵」展示入替

平和記念資料館本館の展示「3 魂の叫び」の一角で「市民が描いた原爆の絵」の原画を展示している「絵筆に込めて」のコーナーでは、8月末、6点の絵を入れ替えました。

今回は、被爆直後に大量発生したウジやハエが描かれた絵を展示しました。被爆直後のウジやハエの発生については数多くの証言が残っていますが、当時の写真や映像にはほとんど写されていません。しかし、「市民が描いた原爆の絵」の中には、原爆を体験した方たちの忘れられない光景として、傷ついた身体に大量のウジがわいたことや、ハエの大群が飛び交っていた光



「絵筆に込めて」のコーナー

景がしばしば描かれています。そのため、これらの絵は当時の惨状を目で見て知ることができる資料として大変貴重なものです。原画からは、複製された印刷物よりも、当時の惨状がずっと生々しく伝わってきます。ぜひ原画を間近で見て、当時の人々が置かれた状況を知っていただければと思います。

今回の展示は令和3年2月23日(火・祝)までです。絵の劣化を防ぎ、長期的に保存していくため、今後も定期的に入替を行います。

(平和記念資料館 学芸課)

## 平和記念資料館資料調査研究会 研究報告第16号を発行しました

掲載論文は当館HPでご覧いただけます。

- ◆ 石丸 紀興 「平和祭・平和記念式典の場所移動と定着過程に関する研究」
- ◆ 久保田 明子 「広島における原爆被災の映像と相原秀二資料について」
- ◆ 高妻 洋成 「リニューアルオープンした本館の展示環境」
- ◆ 静間 清 「広島原爆線量評価に果たした被爆建造物および被爆資料の役割(その3)―被爆鉄材中の<sup>60</sup>Co強度分布―」
- ◆ 竹崎 嘉彦 「『広島および長崎における原子爆弾放射線被曝線量の再評価 線量評価システム2002

DS02』の第5章「地図と航空写真の整合と照合」に記載される内容について地図学的観点から懸念が抱かれる事項の分析と検証」

- ◆ 四條 知恵 「長崎の原爆被害における基礎知識」
- ◆ 根本 雅也 「日本とアメリカのはざまで―在米原爆被爆者の運動史の解明に向けて―」

### 【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課  
TEL (082) 241 - 4004

## 海外からの来訪者が発信するメッセージ ～平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に訳したもの(仮訳)を掲載しています～

### ティジャーニ・ムハンマド＝バンデ／第74回国連総会議長

思い起こすことは重要であり、平和記念資料館が、この重要な目的を果たしていることを大変嬉しく思う。二度とこのようなことが起こらぬように！

(2019年7月24日)



### デニ・ムクウェゲ／医師、ノーベル平和賞受賞者

私は、この場所で完全な恐怖を経験しました。核兵器は廃絶されるべきです。

私たちの人間性は、恐怖から守られなければなりません。

(2019年10月5日)

### ロベルト・モラレス・オヘダ／キューバ閣僚評議会副議長

天皇陛下御即位に際し日本を訪問したキューバ代表団は、広島の平和記念資料館で原爆犠牲者に追悼の意を表すことができ光栄に思います。

この資料館が保存する歴史、二度と繰り返されてはならない忌まわしい犯罪の証言に深い衝撃を受けています。

広島市民の皆様に対し、私は核兵器のない平和な世界の実現というキューバの決意を改めて表明致します。

す。

その夢のためにこそ、キューバ革命の指導者フィデル・カストロは闘い続けたのです。

『常に勝利に向かって』

(2019年10月20日)

**マフマドサイド・ウバイドゥロエフ／タジキスタン共和国国会上院議長**

1945年8月6日に広島<sup>の街</sup>で起きた悲劇は非人道的な悪魔の所業である。この悲劇を二度と繰り返すことなく、未来の平和を築くことが人類の課題である。



(2019年10月24日)

**イブラヒム・モハメド・ソーリフ／モルディブ大統領**

第二次世界大戦中、広島へ投下された原子爆弾に關し、特化した資料を集めたこの歴史的な資料館を訪問することができ大変光榮です。



資料館は、国際的な核兵器廃絶と世界平和の実現へのメッセージを見事に伝えています。特に、犠牲者の遺品、写真、被爆の恐怖を物語る様々な証言や資料から伝わって来るストーリーに心を動かされました。

原爆投下前後の広島を知るにより、この街が被った破壊について、また同時に広島市民の回復力と勇気について知ることができます。記憶に残るこの様な機会を与えてくださいました広島市民の皆様<sup>に</sup>心より感謝申し上げます。

(2019年10月26日)



**アスアド・ターリク・タイムール・アール・サイード／オマーン国 国際関係・協力担当副首相兼国王特別代理**

広島<sup>の皆様</sup>に敬意を表することができ嬉しく思います。皆様<sup>が</sup>示された回復力、忍耐、決意は恒久平和への道標となっています。

(2019年10月26日)

**「原爆の絵」が完成**  
—高校生たちが被爆体験を絵に描く—

本財団は、広島市立<sup>もとまち</sup>基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、本財団被爆体験証言者等と同校生徒が協働し、被爆者の記憶に残る被爆時の光景を描いて当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。昨年度から6人の被爆者と15人の生徒が制作を進め、このたび15点の絵画が完成しました。平成19年度(2007年度)から制作を依頼しており、これまでに130人を超える生徒が携わり、152点もの貴重な絵を残しています。

今年<sup>は</sup>新型コロナウイルス感染症の流行により学校が長期間の休校を余儀なくされるなどしたため、例年より完成が遅れましたが、7月20日(月)に基町高等学校で完成披露会が行われました。マスクの着用やソーシャルディスタンスを徹底し、6人の被爆者と、絵を制作した生徒を始めとする創造表現コースの生徒のほか、本財団及び学校関係者が出席しました。

この完成披露会で、被爆者の<sup>あらいさとる</sup>荒井覺さんの記憶に残る光景を描いた岡田友梨さん(2年生)がスピーチを行い、「広島<sup>の街</sup>に原爆が投下された直後の暗闇を描くにあたり、ススヤチリが舞っている情景を描くのに苦勞しましたが、荒井さんの話を何度も聞きながら自分なりに解釈して描くことができました」と話してくれました。岡田さんは市外の小中学校に通い、平和学習にあまり取り組んだことがなかったそうです。そのため、原爆が投下された時代背景を知り「原爆の絵」制作に役立てるため、映画『ひろしま』(1953年)を視聴したり、写真資料で当時のことを調べたりしました。「原爆について深く知ること」が制作を通して何より大切なことであり、そうした「精神的につらい作業」を通して原爆というものに向き合えないといけない、ということを実感したそうです。岡田さんは「私は荒井さんがあのときに感じた感情を代弁することはできませんが、制作をとおして自分が考えたこと、わかったことを少しでも多くの人に伝えていきたいです」と力強くスピーチを締めくくりました。



「暗闇の中の真赤な太陽」

制作：岡田友梨(基町高等学校普通科創造表現コース)、荒井覺(ヒロシマピース ボランティア)

このたびの制作においては、コロナ禍により生徒が被爆者の話を対面で聞くことができない中、電話で打ち合わせをしたり、絵の進捗状況を写真で伝えるなどしました。また、制作時間を確保するために生徒が自宅にキャンバスを持ち帰ることさえありました。生徒のこうした努力により完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験講話で活用するほか、絵の貸出や、マスコミ等への画像データの提供なども行い、原爆被害の実相を後世に継承するために将来にわたって役立てていきます。

(平和記念資料館 啓発課)

## ウェブ会議システムによる海外への被爆体験証言 —「核超大国アメリカ」のもう一つの顔にふれて—

ネバダ、ホノルル、ロスアラモス、オークリッジ、ハンフォード。これは第二次世界大戦や核兵器開発と深い関わりのある米国の州や町の名前です。そして、それぞれの地にはまた、そこで起こった出来事を後世に伝えるミュージアムや記念館があります。広島平和記念資料館では平成22年(2010年)から海外の聴講者を対象としたオンラインによる被爆体験証言事業を実施していますが、コロナ禍に見舞われた今年、原爆が投下されてから75回目の夏から秋にかけて、そうしたミュージアムや記念館のスタッフから被爆者の話を聴きたいという声が届きました。また、共同で現地の市民に講話を行う機会にも恵まれました。

現在も稼働中のネバダ核実験場の歴史を伝える核実験博物館(ネバダ州ラスベガス)、第二次世界大戦末期、日本の降伏文書調印式が行われた会場が残る戦艦ミズーリ記念館(ハワイ州ホノルル)、「マンハッタン計画」(米国において大戦時に極秘で進められた原爆開発計画)の関連施設を保存し、その歴史を学ぶ場を提供するマンハッタン計画国立歴史公園(ロスアラモス、オークリッジ、ハンフォード)。ヒロシマとは相容れないようにも思われる、こうした米国の戦争・軍事に関わる諸団体が、被爆者の話を聴きたい、あるいは地元市民に聴いてほしい、と思うのはなぜなのでしょう。新型コロナウイルス感染拡大によって日常生活へ甚大な影響が出ているにもかかわらず、なぜ今被爆地広島に目を向けるのでしょうか。

聴講者に尋ねてみると、「私たちは歴史としてのヒロシマは知っていても、実際にキノコ雲の下で起こったことは知らないんだ」という答えが返ってきます。世界中で国境を越えた移動が制限される今だからこ

そ、オンラインを活用し、自分たちの施設が語らない視点を学びたいのだと。コロラド州の自宅で小倉桂子さんの講話を聴いた女性は、「今夜のことはいつまでも私の中に残り続けるに違いありません。小倉さんがご自身の体験から話して



米国の市民へ英語で講話をする小倉さん

くれたことを胸に、自分の持ち場に帰って今後のプロジェクトを發展させていきたいと思います」とのメッセージを寄せてくれました。

被爆者の高齢化が進み、自身の体験を話すことができる人が少なくなってきていますが、証言に込められた核兵器廃絶への思いには、核兵器をめぐる立場や国籍の違いを越えて、聴く者に強く訴える力があります。「核兵器廃絶へ向けてのバトンを、学生の皆さんに手渡したい。」10月下旬、パソコンのモニター越しに映る中央ミシガン大学(ミシガン州マウント・プレザント)の学生約40人に向けて、河野キヨ美さんはこのように講話を

締めくくりました。新型コロナウイルス感染拡大を受け大学封鎖が続く中、それぞれの自宅から聴講してくれた学生たちの真剣なまなざしからは、河野さんの思いがその一人ひとりへ確かに届いていることを実感せずにはいられませんでした。



広島平和記念資料館  
Hiroshima Peace Memorial Museum

ミズーリ州セントルイスにある軍人記念碑・軍事博物館が作成したオンライン講話の案内イメージ当日は約70人の米国市民が、河野さん(写真右)の話に耳を傾けた。  
(英語通訳:佐藤仁美さん)

8月から10月の間、米国の他にオーストラリア、コスタリカ、タイといった世界の様々な地域の学校や市民団体と広島平和記念資料館が共同で講話を実施した中で、米国との実施数は突出しています。その数は、本事業において今年度実施した全18回のうち(10月末現在)、13回にのぼります。当館のホームページを見た方、あるいは過去に当館を訪れた方からの依頼だけでなく、当館による海外での原爆展の開催やそれに伴う現地での被爆体験証言講話の実施、現地ミュージ

アム訪問などを通して、長年築き上げてきた海外ネットワーク経由で開催に至ったケースが多いのが今年度の特徴です。

昨年度までに約90回を実施してきたオンラインによる被爆体験証言事業は、証言者からの惜しめない協力をはじめ、一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会所属の通訳者によるサポート、内部における職員間の技術面の蓄積、ウェブ会議システムの環境整備といった様々な努力が結実したものです。被爆75年という節目の年に、新しい生活様式に対応しながら世界に向けて広く被爆の実相を伝えることが出来ていることを、この場を借りてすべての関係者に感謝いたします。

(平和記念資料館 啓発課)

## 米国・ハワイで初のヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展の開催 一日米開戦の舞台となった真珠湾の戦艦ミズーリ記念館において

広く被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国際世論を醸成するため、広島市と長崎市は共同で、海外において「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を開催しており、被爆から75年を迎えた今年度は、広島市の最初の姉妹都市である米国のハワイ州ホノルル市で初めて開催しています。会場は、その艦上で日本が太平洋戦争の降伏文書に調印し、現在は真珠湾に係留されている戦艦ミズーリの記念館です。

同館は、戦艦ミズーリのたどった歴史を後世に語り継ぐことを使命として1999年(平成11年)に開館し、第二次世界大戦から湾岸戦争までに従事した乗組員たちの記念の品々などを展示しています。2015年(平成27年)からは「神風特別展示」として、南九州市の知覧特攻平和会館が所蔵する特攻隊員の遺書や手紙、遺品を展示しています。

展示会は、全世界で猛威をふるっている新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、当初の予定より約1か月延期され、現地時間の8月13日(木)から開催されました。同日のオープニングセレモニーでは、ハワイの司祭がプレッシングと呼ばれる儀式を行い、ハワイで神聖とされるマイリの葉をハワイ・広島・長崎をつなぐ象徴とし、平和を祈念しました。広島平和記念資料館の滝川卓男館長は同セレモニーに、「被爆者の思いを受け止め、核兵器廃絶と世界恒久平和に向けて共に力を尽くしてくださるよう心から願っています」とメッセージを寄せました。

展示内容は、動員学徒として作業中に被爆し犠牲となった女学生が被爆時に身に着けていたブラウスを始



司祭による展示会場でのプレッシングの様子  
(戦艦ミズーリ保存協会提供)

め、中身が黒焦げになった弁当箱の複製、ハワイ出身のオバマ前米国大統領の折り鶴など、実物資料20点のほか、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネル30点などです。また、昨年6月に戦艦ミズーリ記念館が遺族から受領した佐々木禎子さんの折り鶴が今回の展示会に合わせて展示されています。

展示を見学した来場者は、「日米双方のストーリーを伝えることは誠に重要であり、真珠湾でこうした展示がされるのは素晴らしい取組です」と感想を述べていました。

また、8月21日(金)には、戦艦ミズーリ記念館の職員及び同館のツアーガイドを対象に、広島平和文化センター委嘱被爆体験証言者の小倉桂子さんが英語によるオンライン証言を行いました。参加者は熱心に耳を傾け、目に涙を浮かべて話を聴いている人もいました。証言終了後には、参加者から「彼女の体験は非常に印象的で心を動かされました。今後忘れることはないでしょう」、「証言を聴いた直後は言葉を失ってしまい、何の質問も思いつきませんでした」、「彼女の体験は非常に劇的でかつ悲しいものでした。体験をお話くださったことに深く感謝しています」などの感想が寄せられました。

戦艦ミズーリ記念館での「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」は、11月30日(月)まで開催する予定です。

(平和記念資料館 啓発課)

## 被爆体験伝承者から

熊谷 操さん(平成27年度(2015年度)から活動)

私の母は救護被爆者(被爆者を救護・看護したため原爆の放射能の影響を受けた人)でした。母が体調を崩して2週間の入院で亡くなった時、あまりにあっけない母の死に際し、母の人生について何も聞いていなかったことに愕然としていました。そんな時、広島市が被爆体験伝承者の養成を始めるということを知り、

高齢化した被爆者の「聞いておかななくてはいけない話」、「伝えなくてはいけない話」を「今聞いておかななくてはいけない」と思ったことが、被爆体験伝承者になったきっかけでした。

私は笠岡貞江さん、川本省三さん、植田規子さんの3人の被爆体験を継承していますが、講話でお話しているのは笠岡さんの被爆体験です。

笠岡さんは、中学一年生の時に被爆され、被爆により両親を亡くされました。黒焦げになって大八車に乗せられて帰ってきたお父さんの看病をしましたが、8月8日に亡くなり、遺体を浜辺でお兄さんと二人で焼きました。そして、お母さんとはとうとう会えないまま、後に、お父さんと同じ8月8日に似島で亡くなっていたことを知りました。



バンクーバー補習授業校小学校6年生対象の講話の様子(2019年12月7日)

講話では笠岡さんの思いも伝えます。罪もない友達が、一瞬にして原爆で夢や希望を命とともに奪われたことの悔しい

思い。原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝えていくのが生き残された者の役目だと思って被爆体験証言をしているという思い。被爆者を助けるために活動した外国の人々がいることを知り、「アメリカ憎い」から「原爆憎い」へと変わってきた思いです。そして最後に、平和な世界を築くために自分にできることを探してほしいという、私のメッセージを伝えています。

伝承講話をする中で、笠岡さんの思いを深く受け止めていただいた方がたくさんいます。また、多くの方々に核兵器廃絶への思いを共感していただきました。2017年から3年間住んでいたカナダのバンクーバーで講話したとき、私の講話に感動してバンクーバーから広島平和記念公園を親子で訪問された方がいました。現在、コロナ禍で対面での講話が難しくなっていますが、それでも大事なことは実際に対面してお伝えすることだと思えます。広島県内だけでなく、他府県へ出向いて被爆体験伝承講話を



講話を行う熊谷さん(2019年8月3日、バンクーバーの日系人祭『パウエル祭』で)

広めていくことが必要だと思います。また、世界への発信も大事だと思います。

聴講していただいた方には、伝承者が語る被爆体験者からのメッセージをしっかりと受け取って欲しい、そしてそれを広めて欲しいと願っています。

### 小林 悟さん(平成27年度(2015年度)から活動)

広島平和記念資料館には被爆時12歳から15歳の旧制中学校や女学校の生徒の遺品が多く展示されています。ちょうど今の中学生に当たる年齢の人たちのものです。特に入学したばかりの1年生が爆心地近くの屋外にいたため、このときの動員学徒犠牲者の大半を占めています。原爆が投下された昭和20年(1945年)、入学試験を突破して4月に憧れの学校に入学したばかりなのに、戦争のため学校の授業は停止され、生徒は授業を受けることも無く、ましてやクラブ活動を楽しむことも無く、ひたすら毎日空襲に備えて建物の取り壊し作業(建物疎開)や弾薬などの兵器の運搬、兵隊さんの服や帽子、靴をつくる作業に動員されていました。それもお国のためと、必死に空腹に耐えながら、戦争中の食糧不足により慢性的な栄養失調状態の軍国少年・少女ががんばって働いていたことを思うと心が痛みます。

私の主に中学校での46年間の教師生活のなかで出会った多くの生徒の姿、特に入学式で入場してくる中学校の新入生の姿と、資料館の遺品を見て想像する被爆当時の生徒の姿が頭の中で重なるときがあり、何ともやりきれない思いになります。被爆死した彼らの、「安心して普通の学校生活を送りたい!」という願いがかなわなかった無念の思いと、戦争のさなかであって心から平和を求めた思いを、少しでも多くの次世代の人たちに伝えることができると心に感じ、私は被爆体験伝承者になろうと思いました。

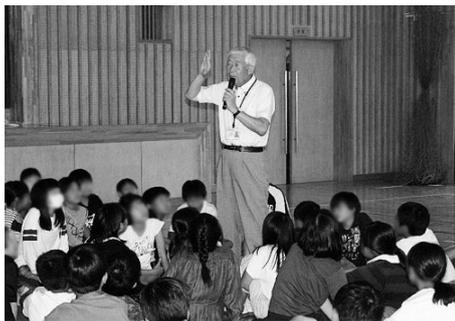
私は伝承者の1期生で、中西巖さんの被爆体験を伝承しています。中西さんは被爆当時、広島高等師範学校附属中学校(現在の広島大学附属中・高等学校)の4年生で15歳でした。現在の出汐町に建物が残る陸軍被服支廠で被爆された体験を基に証言活動をされています。

中西さんは、ほんのわずかな運命の違いで奇跡的に生存され、犠牲になった方々の無念さと平和への思いを今日まで伝えてこられました。今では、中西さんのように実際に被爆を体験し、その記憶を語ることができる方たちが高齢となっておられます。次の世代がその体験を受け継がなければ、被爆という事実が風化してしまいます。「過ちは繰り返しません」と戦後の人たちは誓いました。そのためにも、その「過ち」がどんなことだったのかという事実を私たちは正しく知り、後世に伝えなければならないと思うのです。資料館に展示してある多くの子どもたちの遺品を見るたび

に、そのことを彼らが私たちに強く訴えているように思えます。

私は伝承者として活動していますが、いつも頭から離れないことがあります。それは、被爆体験「証言者」との違いです。私は戦後生まれですから戦争体験を持ちません。「体験していない者が被爆の事実を語れるのか、またその資格があるのか」と問われると、伝承者としてどう答えようかと思えます。しかも「どうしても体験者でなければ伝えられないこともあるという限界」もあります。中西さんにこの悩みを話すと、「それは気にしなさんな。被爆の実相をまず伝えることが大事ですよ。」と言われ、心のつかえが降りたような気がしました。おかげで現在も伝承者として、またヒロシマピースボランティアとしての活動ができています。

伝承講話を追悼平和祈念館や資料館で開始したころは、「伝承」ということが聴講者に理解してもらえらるだろうかという不安がありました。しかし、回を重ねるごとに手ごたえを感じるようになりました。私は、聴講者はどんな年代の人か、どこから来られたのかを把握してから、講話を始めます。特に中・高生であれば、当時の中西さんとほぼ同じ年代の若者です。今の中・高生の置かれた状況と照らし合わせて考えてもらうことができます。また、



山口県の宇部市立東岐波小学校での講話の様子(令和元年9月20日)

米軍が原爆投下の練習用に投下した「パンプキン爆弾」の被災都市から来られた聴講者には、この爆弾の話からスタートします。聴講者にとって広島原爆は遠い世界の出来事ではなく、身近な問題であることを感じてもらうことに努めています。

平成30年度(2018年度)から厚生労働省の予算が付いて、広島県外に伝承者を派遣する事業が始まりました。初めての県外派遣で横浜の中学校に講話に行ったとき、講師が広島から来たということ、そして初めて詳しく原爆の事実を知ったということで、大変な驚きと感謝をもって迎えられました。この時、この派遣事業は今後ともぜひ発展してほしいと心から思いました。国の事業でなければ実現できなかったでしょう。伝承者としてそれだけ意義のある事業に協力できる喜びを感じました。

現在はコロナのために伝承活動だけでなく色々な活動が制約され、世の中が大きく変わろうとしています

が、こういうときだからこそ、次の世代に被爆の実相を伝えることの大切さを忘れないようにしたいです。

### 高岡昌裕さん(平成27年度(2015年度)から活動) —伝承者としてのスタートライン—

私は被爆体験証言者の新宅勝文さんと植田規子さんの被爆体験伝承者一期生としてデビューし、特に小中学生を中心に講話をしてきました。新宅さんからは特に「抑揚が大事だ」ということを繰り返し学びました。また植田さんからは「歴史をきちんと勉強しつつ、将来を担う子どもたちの目線に寄り添い、たくさん興味を持ってもらい、自分で考えることをうながすことが大切だ」ということを学びました。

当初は、体験してもいない事実を伝承することなどできるのだろうか、という不安を抱きつつも「証言者の話に共感したことを真摯に伝えていこう」という、いわば熱意だけを胸に活動(=熱弁)をしていたと思います。

あるとき、秋田大学教育文化学部において、将来教員を志望している学生の方々に講話をする機会をいただきました。そこで直面したのは、「伝承者も一種の“役者”であらねばならないのでは？」という、いわば新宅さんに何度も言われた「抑揚が足りない」との指摘だったのです\*。その夜、秋田大学の外池智教授とお酒を飲みながら、私のような伝承者はいずれ淘汰されてしまうのかもしれない、と押しつぶされそうな不安を口にしました。

その後は、スティーブ・ジョブズ氏やテレビ番組「TED」、マイケル・サンデル教授、ひいては落語まで様々なものを題材にした、話法を説く文献をたくさん読みました。そして、証言者の方の講話の原典を、何度も何度も繰り返し唱読し、被爆前後の歴史に関する文献も参考にしました。

今では、自分の持ち味である「やさしく落ち着いた口調」を活かしつつ、ジェスチャーもまじえ、適度な“間”をとりながら、当時の情景が思い浮かぶように話をしています。情景が浮かびやすいと、子どもたちは自分の想像力を駆使して、真剣に平和の大切さを、自分の言葉で考えてくれます。子どもたちから質問がたくさん出るときには、響くものがあったな、と伝承者と



新宅さん(前列)の誕生日を祝う伝承者一期生。後列左端が高岡さん。(2015年)

してのやりがいを感じます。ここにきて、ようやく新宅さんと植田さんから学んだことが血肉となり、伝承者としてのスタートラインに立てたかな、という心境です。

ちょうどこの原稿を作成している時期に、2021年1月の核兵器禁止条約の発効が決まりました。この世界に核兵器のない時代が訪れることを願いつつ、これからも倦まずたゆまず、地道に伝承活動を行って参りたいと思います。

\*詳しくは「承継的アーカイブの活用と『次世代教育』の構築」(2018.02 研究者代表 外池智) 参照。

## 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 ホームページをリニューアルしました

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆75年となる今年、ホームページ (<https://www.hirotsuitokinenkan.go.jp/>) をリニューアルしました。

8月3日に日本語、英語を、11月4日に中国語、韓国・朝鮮語を、旧サイトから新サイトに移行しました。

### ○分かりやすく、使いやすくなりました

スマートフォンやタブレット端末など、利用者のデバイスに応じて最適なデザインに表示します。また、



リニューアルしたホームページ

知りたい情報にすばやくたどりつき、疑問に正確にお答えできるようレイアウトなどを工夫しました。さらに、高齢者や障害者の方も利用しやすいよう、アクセシビリティを向上させました。

### ○平和情報ネットワーク (<https://www.global-peace.go.jp/>) をご活用ください

広島と長崎の原爆死没者追悼平和祈念館が共同で運営するホームページで、日本語、英語、中国語、韓国・朝鮮語のほか24言語で被爆体験記、被爆者証言ビデオ、朗読音声を公開しています。

なお、リニューアルに伴い、一部のURLを変更していますので、ご注意ください。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

## 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 企画展 時を超えた兄弟の対話 ーヒロシマを描き続けた四國五郎と 死の床でつづった直登の日記ー

来年2月28日(日)まで延長します

今年1月1日(水)から開催している企画展を令和3年(2021年)2月28日(日)まで延長して開催します。

画家としての才能を、反戦・核兵器廃絶を訴えることに全てを捧げた四國五郎(1924-2014)。そのきっかけは、最愛の弟・直登(1927-1945)が原爆により、18歳で短い生涯を閉じたことでした。被爆当日から亡くなるまで、病床でつづられた弟・直登の日記を中心に、兄・五郎の追悼文や作品を紹介します。

映像作品では、女優の木内みどりさん(故人)が五郎と直登の声をひとり二役で演じ、時を超えた2人の対話を再現しています。



企画展チラシ

一人でも多くの方々にご来館いただき、平和の大切さについて考えていただきたいと思います。

(原爆死没者追悼平和祈念館)

## 被爆体験記の執筆をお手伝いします

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆の記憶を書き残したいけれども執筆することが困難な方から聞き取りを行い、体験記としてまとめる被爆体験記執筆補助事業を行っています。完成した体験記は祈念館内で公開します。これまでに154人の方から聞き取りを行いました。

今年度は新型コロナウイルスの流行を受け、マスクの着用やパーティションの設置など、感染予防対策を徹底して行っています。

今年度最初の聞き取りでは、日系ハワイ移民2世の父をもつ、82歳の女性から話を伺いました。原爆によって自宅を失ったこと、家族が大けがをしたことなど、原爆がもたらした被害や惨状に加え、「国外で生まれた」ことで父が受けた差別についても話されました。また、この方は戦後ハワイへ渡り、約20年間アメリカで生活した後、日本に帰国されましたが、日本

とアメリカ、2つの国で暮らした日々を振り返り、「現代はヘイト（憎しみ、憎悪）がはびこっているけれど、さまざまな国・地域や人種が協調してやっていかないとイケませんね」と話されました。

広島県内にお住まいで執筆を希望される方は、気軽にお問い合わせください。

### 【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

TEL (082) 207 - 1202

## 「やさしい日本語」講座を実施しました

広島市に暮らす外国人は年々増加しています。彼らを地域社会の一員として受け入れ、共に暮らしていきたいと思うときに、言葉の壁につまずく日本人の方もいるのではないのでしょうか。

国際交流・協力課では、9月26日（土）に公益財団法人ひろしま国際センターの犬飼康弘いぬかいやすひろさんを講師に迎え、「やさしい日本語」講座を開催しました。地域



犬飼康弘講師に熱心に質問する参加者

で暮らす外国人とコミュニケーションを取るための分かりやすい日本語を学ぶ講座です。

日本在住外国人の大部分

が、日常的で簡単な内容であれば日本語でコミュニケーションが取れること、しかし、熟語や漢字が多い「難しい日本語」では大変理解しづらいことを、様々なデータを用いて解説していただきました。また、災害などの緊急時に外国人にとって難解な日本語で情報発信を行うと、安全に関わる情報の伝達が遅れ、命に関わることも指摘されました。

まず、「やさしい日本語」で表現するポイントを習った上で、グループに分かれて練習を行いました。以下は、実際の練習問題です。

#### やさしい日本語にしてください。

Q 余震による家屋倒壊の恐れがないとは限らないため、避難所で待機してください。

↓

A まだ、余震<後からくる地震>が心配です。余震で家が倒れます。危ないです。避難所<みんなが逃げる場所>にいてください。

いかがですか。ポイントは、①難しい言葉は簡単な言葉に言い換える（繰り返し使われる重要な情報はあえて残す）、②一文の情報量を少なくする、③分かりにくい言葉は例を出し、必要な情報は補う、④不要な情報は捨てる、⑤曖昧な表現・二重否定を避ける、などです。

みなさんもぜひ、「やさしい日本語」を使って外国人の方とコミュニケーションをとってみてください。

（国際交流・協力課）

## 「外国人のための安全教室」を実施しました

外国人の増加に伴って、広島市に住む外国人市民が交通事故や犯罪に遭遇する危険性も増えています。日本の習慣やルールがよく分からないことが原因で、悪気はないのに、知らないうちに問題を起こしてしまったり、トラブルに巻き込まれる外国人もいます。

そういった危険を避け、地域社会の一員として安全に生活してもらうため、9月28日（月）、広島県警察本部と広島中央警察署の協力により、生活ルールや交通安全の学習機会を提供する「外国人市民のための安全教室」を開催しました。中国、台湾、フィリピン、パレスチナ出身の15人が参加しました。

講師は広島県警察本部と広島中央警察署の警察官です。母国と異なるため注意が必要な生活や交通のルールを分かりやすく教えていただき



交通標識について学ぶ参加者

ました。講義は「やさしい日本語」を使用し、適宜英語と中国語の通訳を交えながら行いました。

また、難しい内容ばかりではなく、警察署内で110



白バイと記念撮影

番を受け、巡回している警察官やパトカーの位置と事件発生場所とを即座に映し出す大きな液晶スクリーンがある「110番通信指令室」の見学や、パトカーや白バイとの記念撮影など、楽しい一幕もありました。参加者の学生や親子は、楽しみながら安全について学んでいました。

（国際交流・協力課）